

時間を敬う

2025年8月1日

読者の皆さん

あなたはこれまで、何が時間の感じ方に影響を与えているかを考えたことがありますか？ なぜある日は特別な感覚や関連付けを伴うのに、次の日は全く違う感覚や関連付けを呼び起こすのでしょうか？ それはあなたの選択次第、つまりその時間に何を選択して過ごすかによるのだと思いますか？ それとも、時間そのものや状況によるのでしょうか？ **2025年のグルマリーのメッセージ**を学んでいるこの年、こうした問いを持つことには意味があるかもしれません。

古代ギリシャの哲学者たちは、時間について考察した書き物の中で二つの主要な概念を明確に述べました。一つはクロノスと呼ばれ、もう一つはカイロスです。¹ クロノスは、量的に測れる時間の側面です。それは1年の日数、ある作業を完了するのにかかる時間、ある出来事が起きた、または繰り返された日付といった、何かの長さや回数や時期などです。それは私たちが共通認識として持っている時間の構造を指します。

一方、カイロスはもっとニュアンスのある概念です。ギリシャ語でカイロスという言葉の意味の一つは、「適切な時機」です。これは、ある瞬間が何を必要としているかということの意味し、クロノスという時間の流れの中において、何かを行うのにふさわしい時、あるいは何かが起こるのにふさわしい時があるという考え方です。カイロス、つまりふさわしい時がいつかを決定づける要素はさまざまで、引き金となる出来事や、私たちの個人的状況、そしてより広い社会的背景などの複合的な要因が関係します。

つまり、カイロスはより「質的」な時間の概念とされます。日付や時間、期間といった数値的な情報は、有用で必要ではありますが、それだけではその時がなぜ重要なのか、その時に何をすべきなのかまでは示してくれません。カイロスという概念は、時間と積極的に関わる姿勢を前提としており、それを通じて人は時間のダイナミズムを認識し、その動きに注意を払い、呼応していきます。

自然界にはその良い例があります。例えば季節の移り変わりです。カレンダーでは春や秋、夏の始まりの日を公式に定めるかもしれませんが、自然界はその構造に縛られてはいません。花は咲くべき時に咲き、葉は条件が整った時に色づきます。地球は驚くほど適応力があり、回復力に富み、常に自らに忠実であり続けています。

クロノスとカイロスについて学ぶことは、グルマーイのメッセージを学ぶ上でも、また今の自分の時間との向き合い方を見つめ直し続ける上でも、私にとって価値あるものでした。私は時間を次のように考えるようになりました。時間は——そうです——私たちが人生を営む上での整った背景です。それは人生に秩序をもたらし、進歩や変化を測る手助けとなるものです。そしてまた、時間とは、生きた「存在」であり、私たちが直感や知性、識別力をもって常に対話することのできる、そして対話すべき相手でもあるのです。グルマーイが言ったように、「時間は神です。時間は神聖です。時間は稲妻です。時間は大いなる意識の流れです」

1月1日のスウィートサプライズ(嬉しい驚き)でグルマーイは、時間を象徴するシヴァ神の形であるマハーカーラについて話しました。私にとっては、神を体現した形としての時間のこの姿は、畏敬の念を抱かせると同時に示唆に富んでいます。それは、時間が意識を持っていることを示しています。時間は私たちとコミュニケーションできます。時間は私たちに合図を送り、何が必要なのかを伝えます。私たちに必要なのは、十分に注意を払うことだけです。

さて、それにはどうしたらいいのでしょうか？ どうやって時間に注意を払うのでしょうか？ どうやって、時間のささやき、つぶやき、時にうなり声を聞くのでしょうか？

グルマーイはスウィートサプライズの中で、このことも説明しました。覚えていますか？グルマーイは「中心にいること」という教えを、私たちに与えました。言い換えれば、私たちの存在の中心、私たちの心、内なる神の座のことです。さらに最近では、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでのグループルニマーの月のサツツァングで、グルマーイは再びこの教えについて話しました。

グルマーイは言いました。

人々が、自らの中心に至る方法を学ぶことは良いことです。人々は本当にバランスを欠いていて、大きく中心から外れています。人々は自らの魂——自らの中心——に確固として在り、そこから出て来るのではなく、ただ風に流され、嵐に流されているのです。

儀式はこれにとっても役立ちます。その力をまだ理解していない人々がいるにしても。儀式は、人が自らの中心に戻るのを助けます。

グルマーイが儀式について話した時、彼女は特にプージャーをささげることと、その修行にまつわるすべてのことについて言及しました。プージャーをささげる際に取りの一つ一つのステップは、私たちが自分自身の中心の体験へと導くことを意図しています。「内側の奥深くで、私は知っていた」と、人々が言うのを何度耳にしてきましたか？ 英知は私たちの存在の奥深くに宿っています。私たちが儀式を通して、プージャーをささげることを通してつながるのは、この内側で知っていることなのです。

シッダ・ヨーガの道では今月、日付と行事が見事に重なります——重要な時と大切な機会が、最高に興味深い形で暦の特定の日に一致するのです。

これは何を意味しているのでしょうか？

- 8月8日、私たちはバガヴァーン・ニッティヤーナンダの太陽暦のプンニャティティを祝います。これはバデ・バーバが肉体を離れ、至高なる意識と一つになった日です。それはシッダ・ヨーガの道において、私たちにとって神聖な日——祈り、思い出し、感謝する日——です。インドの教典と伝統は、たとえ偉大な存在がこの地球から旅立ったとしても、信奉者たちは偉大な存在の祝福を体験し続けると、私たちに教えています。
- 8月8日にはまた、ラクシャー・バンダンを祝います。シッダ・ヨーギにとって、グルと弟子の間の、保護と愛の絆を祝う時です。グルマーイはこの絆をアクシャタである、すなわちサンスクリット語で「決して壊されないもの」であると話しています。
- 8月15日は、植民地支配からのインドの独立記念の日であると同時に、私たちはバーバ・ムクターナンダのディヴィヤ・ディークシャーを祝います。それは、バーバが彼のグル、バガヴァーン・ニッティヤーナンダからシャクティパートの伝授を受けた日です。結果的にそれはバーバがシッダ・ヨーガの道を確立することにつながっていったので、今日ここにいる私たち全員にとって重要な出来事です。
- 8月15日はまた、クリシュナ・ジャンマーシュタミー、クリシュナ神が生まれた日といわれます。モーハラートリと呼ばれるクリシュナ・ジャンマーシュタミーの夜は、インド暦によれば1年で最も縁起の良い3夜のうちの1夜です。

驚くほどの出来事の重なりだと言えませんか？ 8月8日と8月15日は、バデ・バーバのプンニャティティとバーバのディヴィヤ・ディークシャーが太陽暦に基づく祝祭日であることから、シッダ・ヨーガの道ではいつも注目されます。しかし、他の二つの祝祭日——ラクシャー・バンダンとクリシュナ・ジャンマーシュタミーは、太陰暦に基づいて決定されます。こうした理由で、それ

らが祝われる日は年によって異なります。ですから、これらの祝祭日が 2025 年には同じ数日に集中していることは、この上ない偶然のように思われます。

あるいは、それほど偶然ではないのかもしれませんが。もしかしたら、グルマーイのメッセージが、時間との関係性についてである今年、これもまた時間が私たちに何かを伝えようとしている事例の一つなのかもしれません。ある瞬間が何を求めているかを特定することは、必ずしも簡単なことではありません。少なくとも、私の経験はそうでした。しかし、8月の、今のよう、すべての印が同じ方向を指し示しているような時は確かにあります。何をするのが賢明で有益であるのかが申し分なく明らかな時があるのです。

8月においては、これは神とグルを思い起こし崇拝することを意味するのだと私は感じています。もちろん、シッダ・ヨーガの道では、どんな時も神をたたえる良い時だと、私たちはグルマーイから学んできました。どんな時もグルへの私たちの敬意を表す良い時です。実際、この夏、この数カ月の間に祝ってきたたくさんの喜びあふれるシッダ・ヨーガの祝祭日で、私たちはまさにそうしてきました。それでもなお、自分自身の内側で私たちが体験できる善と神性には限りがないことを、グルマーイは私たちに教えています。シッダ・ヨーガのサーダナーでは、グルマーイが言うように、私たちは常に「偉大から、より偉大へ、そして最も偉大へ」と進んでいるのです。

ということで、それは8月なのです。

8月——神とグルから受ける計り知れない恩恵と保護を祝う月です。そうすることで、私たちは心に深い平和を体験します。

8月——時間を有意義に使おうという意図を倍増する月です。そうすることで、私たちは周囲に平和な環境を生み出します。

ここで、考えるための材料として、質問を一つ二つしてみましょう。あなたは時計を持ちたいですか？ それとも、一日中「穏やかな時」を過ごしたいですか？ この二つは相いれないものなのではないでしょうか？ 私たちは神の体験を得るために神を崇拝します。同じように、私たちは時間を知ることになるために時間を活用します。そうすることで、私たちは内なる神殿——平和に満ちた神聖な空間——とのつながりを強くするのです。

心を込めて

イーシャ・サーデサイ



© 2025 SYDA Foundation®. 著作権所有。

¹ The explanation of *chronos* and *kairos* in this letter is drawn primarily from: John E. Smith, "Time, Times, and the 'Right' Time; *chronos* and *kairos*," *The Monist: Philosophy of History*, Vol. 53, No. 1 (1969), pp. 1-13, <https://www.jstor.org/stable/27902109>.